III

若者が主体的に参画している活動事例

この章では、ジュニアリーダーによる活動とは異なる事例として、若者が地域で子ども活動を展開している事例を紹介しました。

子どもが主人公の地域活動を育てる

特定非営利活動法人 東京少年少女センター 会長
少年少女センター全国ネットワーク事務局長
神代洋一

1、私たちの会の紹介

NPO 法人東京少年少女センターは、1982 年に「子ども組織の自主的･民主的な発展」を願う父母、青年、教育関係者らが集まって結成され、2000 年 11 月に NPO 法人となりました。

子どもたちが集まり、遊び、行事を作り出していくことは、子どもが持っている本来の権利を自分たちで実現していく過程であり、それを身近な地域で行っていくことは、民主的な社会の形成者としての住民(市民)を育てることであると考え、「子どもたちによる、子どもたちのための、子どもの組織」づくりをめざす活動を行ってきました。

私たちの会では、子どもたちの活動のサポート･指導役として、青年の役割を重視しています。「○○すべき」と大人が子どもを引っ張ろう、教え込もうとするのではなく、子どもたちのあこがれの存在であるちょっと年上のお兄さん･お姉さんが、子どもたちの話をよく聞いて、いっしょに悩んだり、考えたりしながら、子ども自身が何をどうしたらいいのか気づくよう、じっくりと関わることをだいじにしてきました。

公園や公民館などに集まって遊ぶ「遊び会」、クリスマス会などの「季節行事」、ハイキングやキャンプなどの「野外活動」を月1～ 2 回行うこと、その準備やまとめのための「実行委員会」や「全員での話し合い」を適宜行うというのが、子どもたちの実際の活動スタイルです。

取り組みを「企画、準備」し、「実践」し、「まとめる(総括する)」という一連の流れを子どもたちがやり切れるよう、どのようにサポートするのか、その過程で起こる子どもたちのさまざまな問題にどう対応していくのか、青年たちは「指導(員)会議」を持って、的確な指導ができるように学んだり、話し合ったりしています。

「集まって遊ぶのが楽しい」「行事や遠足に出かけられるのがうれしい」…小さい子どもたちの素直な願いであり、喜びです。いまの社会の中では学年が進むにつれて、ともすると「あそぶ」ことが「罪悪視」され、「塾」や「おけいこごと」「スポーツ活動」で個人的なスキルを高めたり、「競争して成果をあげること」のほうが「意味があること」という圧力が強くなってきます。「小さい子といっしょに遊んでいるところを見られると恥ずかしい」「まだ、そんなことやっているの！と同級生から言われる」「そろそろ受験だから、子ども会はやめたら？と親から言われた」など、内外からの圧力の中で、活動を去っていく子も少なくありません。

子ども自身が「集まること、遊ぶこと、楽しいとりくみを作ること」が自分の人間としての欠かせない権利だと自覚することがなにより大事なのですが、そのためにも、親やまわりの大人たちが正しく子どもの権利を認めること、子どもが社会人として、市民としてまっとうに育つためには自治的な集団(組織)活動の体験が欠かせないことをしっかりとつかんでいることが必要です。

私たちの会では、学習会や研究会の開催、パンフレットの発行などを通して、子どもの異年齢集団活動の理解を深めています。

子ども－青年－親の三世代の育ちあいを考える中で、活動の中で育った子どもたちが、青年になって後輩の子どもたちと関わり、さらに結婚し親となって地域の子ども組織を支える活動の担い手となっていくという大都会の中で失われつつある子育ての文化が伝承できるコミュニティーの創造にも微力ながら一役をかっているのが私たちの団体の特徴です。

2、子どもが主人公の地域活動を育てる

私たちは、地域子ども組織の役割を「地域にあって、子どもたちの暮らしのありようとかかわりながら、自らの権利の実現をめざす生き生きとした地域生活(地域活動)を創造する核となることをめざす集団」ととらえ、具体的な実践を交流する中で「地域に根ざす子どもが主人公の活動のあり方」を考えあってきました。

全国津々浦々にさまざまな子ども会や少年団、子ども組織の活動が展開されていますが、「子どもが主人公の活動」という視点で見たときに次のいくつかの点で考え直してみる必要があると思います。

① 大人が決めて子どもたちを引き回すのではなく、子どもたちに提案して、子どもたちが運営するとりくみとなるように配慮しているか
② 子どもたちが話し合って決めたことを理解してサポートする大人の姿勢があるか
③ 活動を「計画し、実践し、総括する」という一連の流れが子どもたちによって行われているか
④ 子どもたちの自治的な活動が育っているか

M 区のある子ども会では、毎月 1 回、学校の校庭などを使って集団遊びを楽しむ「あそび会」を行っています。最初の頃は、リーダーの青年たちが子どもたちに「いっしょにあそぼう」と声をかけ、遊びの内容は、集まった子どもたちの意見も取り入れながらですが、大筋はリーダーが決めて行っていました。ルールの説明も、リーダーが前に立って大きな声で子どもたちに説明するという風でした。

ある年の冬のこと、リーダーたちは「季節にあった行事をふだんできない規模でやったら楽しいのでは」と考え、「今度の遊び会は、ジャンボカルタ大会をやる」と決めて、子どもたちを誘いました。リーダーたちは意気込んで準備を行ったのですが、子どもたちの反応はいまひとつ、参加者もいつもより少なかったのです。

なぜ少なかったのか。参加した一人の子どもの発言がリーダーたちの胸をつきました。

「いつもは、『あそぼう！』って言って集まるでしょ。だから『何して遊ぼうか？』とか楽しみだけど、今日は、『カルタをしよう』だったから、カルタをやりたい子しか集まらなかったんじゃない」

地域の子ども会育成者から、「せっかく行事を企画しても子どもたちが集まらない」、「集まっても小さい子どもたちばかりでお守りをするのがたいへん」という声をよく聞きます。「いろいろなゲームをして、『これで子ども会を終わります』と言ったとたんに『もう、遊んでもいい？』と聞かれてショックだった」という声もよくあります。

ちょっとした遊び活動ひとつとってみても、「子どもたちの子どもたちによる…」活動を育てることは簡単ではありません。

M 区の子ども会では、その後、次の「あそび会」を準備する「実行委員」に子どもたちから立候補してもらい、実行委員の子どもたちと相談しながら準備をし、お誘いのビラも子どもたちが作成し、友だちに配るようにしました。「自分たちで決めて、自分たちで誘いかけ、当日を成功させて次につなげる」というサイクルをつくる中で、「子ども会は自分たちのもの」という意識を育てています。

先にあげた 4 つの視点を具体的な子どもたちの活動の中で、どう発展させていったらいいのか、育成者･リーダーは実践から学びながら的確なサポート･指導の方向を考えていかなければならないと思います。

3、「仲間」が育つ活動－思春期と子ども組織

10 歳くらいまでの子どもたちにとっては、「いっしょに楽しく遊ぶ」ことがなによりの願い、要求です。夢中になって遊んだり、遊びの中で起こったトラブルを話し合いで解決したりすることを通して「友だち」関係を育んでいきます。

しかし、10 歳を越える頃からは、「いっしょにいて楽しい」だけでは済まなくなってきます。「友だちは自分のことをどう思っているのか」が気になり出します。これまで何も感じなかった異性を意識するようになったり、学校や家庭、社会的な影響の中で進路や進学についても悩んだりするようになります。悩みはあるけれど、まだどう表現したらいいのかわからない、「もし裏切られたら」と思うと友だちにも簡単に打ち明けられない…。そんな思いの中で「子ども会に行っても心から楽しめない」「小さい子ばかりだし、話が合わない」などの理由で活動に出てこなくなる傾向が強まってくるのもこの頃です。

K 市で行った子ども会のキャンプでは、子どもたちが話し合い、テーマを「仲間」に決めました。「学校は友だち関係がごちゃごちゃしていて、気を使う」「学校では自分を作らないといけない」「学校でいじめが原因で自殺を考えた子もいる」と口々に現実の学校生活の「厳しさ」を語り、「何かあるととことん話し合って、自分をさらけ出せる」この集団は、「ホッとでき、安心して本音で話せ、仲間がいて、遊びが楽しいだけじゃない集団」だと言うことを「みんなに伝えたい」と言う中学生たちの話し合いから生まれたテーマでした。

決めてはみたものの、子どもたちは、キャンプファイヤーの出し物の中で、「仲間」をどう表現するか悩みました。「仲間って言われてもよくわからない」という意見や「仲間だと思っていた子にいじめられた」という子の辛い思いと向き合う中で、「仲間ってなんだろう？」という問いと改めて一人ひとりが向き合うことになったのです。

子どもの権利の実現のために、いっしょに活動する人間関係は、「仲間」と呼ぶのにふさわし

い関係でしょう。私たちの会は「子どもたちの仲間を育てる」ことをスローガンに掲げています。残念ながらいまの社会は、人間的な成長・発達を否定する状況に満ち満ちています。そこに流されずに、人間らしい生き方、協働のしかたを青年や大人のサポートを受けながら身につけていくことが子どもたちの地域活動に求められています。 10 代以降の思春期の子どもたちの活動には、こうした視点でのとりくみが欠かせないものと私たちは考えています。

4、 青年リーダーを育てる

子どもたちの活動にとって欠かせない存在である青年リーダー。時には優しくおだやかに、時には情熱的に激しく遊び、活動する青年たちの姿は、子どもたちにとってはもちろんのこと、父母にとってもあこがれのまとです。

これまで述べてきたように、私たちは子どもの異年齢集団活動に果たす「青年」の役割はたいへん大きいと考えています。かっての村社会では「子ども組」から「青年団」に入ることは、一人前の住民として認められ、地域の行事や防災、共同の仕事を支える一員になる重要な成長の節目としての意味を持っていました。青年団が果たす役割のひとつが「子ども組」の「指導」でした。

わたしたちの会では、

① 日常の遊びや活動の個々の場面で青年が子どもたちに寄り添いながらサポートすること。
② 子どもたちだけでは企画・準備・運営することが困難な規模のイベントを「子ども参画」を基本に置きながら創造・構築すること。
③ 指導や事業創造の力量を高めるための学習を自主的・自覚的・集団的に行っていくこと。

を「青年集団」の役割と考えています。

「夢と冒険 ぼくらのキャンプ」をスローガンに全都から 500 人以上の子ども・青年が集う 3 泊 4 日の「少年少女キャンプ村」の運営、 1000 人以上の子どもたちにあそびの楽しさを伝える「あそび万博」の運営をはじめとして、数々の大きなイベントを作り上げていく中で、青年自身も「社会的な仕事」をする意義・責任を学んでいきます。

S 区や T 市の青年たちは、「もっと多くの子どもたちにイベントに参加してもらいたい」、「子どもの仲間作りの活動を知ってもらいたい」という思いで、資料を抱えて地区にある学校を訪ね、直接、校長先生に会って話を聞いてもらいました。青年たちの子どもにかける思いに感じた校長先生は、教育委員会にも連絡をとって全校でお誘いのビラ配布ができるようになりました。その後も、学校の宿泊行事の付き添いに青年を誘ってくださったり、PTA の広報誌で活動を紹介してくれたりとさりげない援助をしてくれるようになりました。

青年の生き方・活動が学校や地域に認められ、励まされるということは、何より当の青年たちの大きな自信になります。子どもたちと関わる活動は、単に個人的な趣味の活動ではなく、社会的な役割・意義を持った活動だという自覚も生まれます。

最近、学校や企業で「ボランティア活動」が奨励されるようになりました。「内申書や履歴書に記載できる」からと私たちの会の門をたたく若者も増えています。

子どもの成長と自己の成長を結びつけ、その活動の社会的意味を理解し始めた青年リーダーたちは、こうした動きに対して「ぼくたちの活動はボランティアではない」と主張します。

「ボランティア」という言葉が独り歩きして、青年たちの活動評価に混乱を与えているのは残念なことです。ボランティアの日本語での概念として、「奉仕活動」「善行活動」「社会貢献活動」などさまざまな訳が飛び交っていますが、青年が子ども会の育成や子ども集団の活動に関わることは、そのどれでもなく、青年が地域の中で一人前に育っていく上で必要不可欠な要素のひとつと私たちは考えています。

地域のコミュニティーが失われる中で消えていったものは、子どもたちの異年齢集団だけではありません。地域社会の中でそれぞれの世代に応じた役割を持って生きるという青年や大人の生き様が消失し、見えなくなってしまいました。子どもたちは、誰のどんな文化を模倣したらいいのでしょう。力強く遊び、活動し、生きる先輩集団の姿が身近に見えることは、子どもの社会的成長にとってなによりの栄養です。

子どもの仲間作りの活動は、いまの社会の中でそれぞれの世代に応じた人間らしい生き生きした生活を取り戻すための努力を子どもは子どもなりに、青年は青年なりに、そして大人は大人らしく行っていく世代を超えた仲間関係を育てていくことにもつながっているのだと思います。

【団体資料】

団体名：特定非営利活動法人 東京少年少女センター

設立： 1982 年 10 月 NPO **認証：** 2000 年 11 月

所在地：〒 151-0053 東京都渋谷区代々木2-44-11 オフィスホワイトバーチ1 F

電話： 03-3379-7479　**ファックス：** 03-3379-7027

ホームページ： http://www.children.ne.jp/　**電子メール：** info@children.ne.jp

目的：「この法人は、子ども組織の活動の自主的で民主的な発展を願って、東京都内で地域の異年齢集団の活動や子ども組織を育てる活動に関わる人たちに対し、その活動を支援する事業を行うとともに、そうした活動の意義を都民に啓発するための事業を行うことを通して、子どもたちの地域での健やかな成長･発達に寄与することを目的とする。」(定款より)

※詳細は上記ホームページを御覧ください。

PR：下記のような活動をしています。

☆ 無料ホームページ開設サービス

全国の子ども会や子どもの異年齢集団に関わる人たちのために、「無料ホームページ開設サービス」を行っています。

開設申し込みは→ http://hiroba.children.ne.jp/

☆ 子育て相談、子ども相談、活動相談

単発の相談： http://www.children.ne.jp/about/contact.html

継続した相談： http://www.children.ne.jp/counsel/

☆ 季刊誌「ちいきとこども」発行

☆少年少女センター全国ネットワーク

青山子ども会

副会長　麻生裕一

私が青山子ども会に入会した理由は大きく 2 つあります。1つ目は自分自身の成長のためです。私は将来、小学校の教師になりたいと思っており、大学も教育学科に所属しているので、教師になる前から子どもたちと関わっていくことが、自分にとってとても良い経験になると思ったからです。 2 つ目の理由は地域の子どもたちのためです。現在は、都市化やテレビゲームなどの普及により、子どもたちの遊び場が減少しているのではないかと感じます。そこで、子どもたちに遊び場を提供するということ、そして子どもたちに様々な体験を通して豊かに育ってほしいという願いから、入会しようと思いました。

実際に活動をしてみると、「楽しい」と「難しい」と両方を感じました。子どもと遊んでいると、素直に楽しいと感じますし、子どもの発想の豊かさや、純粋さにおどろかされます。しかし、子どもとの関わり方というのがすごく難しいと感じることがあります。それは、子どもの暴力行為に関してです。一緒に遊んでいると、パンチやキックをしてくる子がたくさんいます。戦いごっこのように接してくる子には一緒に遊ぶということができるのですが、そういう意図でなく本気でやる子がいます。そういうときに、私たちはどういう対応をしなければならないのかということで、難しいと思うことがあります。親ではなく先生でもない大学生という立場が難しいのだと思います。会全体としても、このことについて何度も話し合っており、やはり度を越えた暴力行為があった場合は、しっかりと叱り、子どもに理解をさせることが大切だということになっています。このように子どもと関わっていく上での難しさを経験しつつも、自分自身にとっての良い経験になっていることに間違いはないと思います。そして、子どもにも様々な活動体験を通して、大学生と接することを通して豊かに成長してくれることを期待しています。

私たちは月 2 回ミーティングをして、活動の反省や企画書発表、サマーキャンプのことなど様々な内容を話し合っており、 5 時間以上話し合っていることもしばしばあります。やはり、地域と関わっていくサークルであり、時には子どもを預かるという重大な責任が伴うサークルであるため、中途半端ではいけないという思いで真剣に取り組んでいます。その甲斐があってか、青山子ども会が相模原で活動をするようになってから 3 年になりますが、しだいに地域の方たちに青山子ども会が知られてきているなと感じます。 1 泊 2 日のサマーキャンプや春の遠足などの参加希望者が増加し、小学校や福祉関連機関からのいろいろな依頼を受けるなど、活動の幅も広がってきています。

しかし、それに伴う問題も起こっています。参加希望者の増加に伴い、人数制限をせざるをえない状況となっていることです。それはつまり、「参加したいのだけど参加できない子ども」が増加してしまうということです。そして運が悪いと連続して参加できないという場合があります(実際に起こっています)。私たちとしては全員参加させたいのですが、安全面を考えるとどうしても限界があります。そういった矛盾がとても問題になっていて話し合いの主題となることがしばしばあります。これからも話し合いを重ねて、よりよい方法を考えていくことが必要であると思います。

様々な問題はありますが、私たちはこれからも地域の大学生として、地域の子どもたちと接し、共に成長するという目標に向けて、そしてなにより自分たちが楽しんで活動をおこなっていきたいと思っています。

活動データ

問い合わせ先	代表　麻生裕一	-	a1204002@cc.aoyama.ac.jp
活動エリア	相模原市大野北地区	活動拠点	大野北こどもセンター
自主活動	普段は毎週土曜日13:30～16:30大野北こどもセンターや大野北小学校の校庭で工作やゲーム、ドッジボール、障害物リレーなど毎回違う活動をしている。		
自主研修		内　容	講師（指導者）
初心者向け	実施していない	-	-
中上級者向け	実施していない	-	-
活動上の課題	会員の増加傾向に伴い会員間の責任感ややる気の格差の解消。地域との関わり方。		
連携（協働事業）	連携（協働）相手	-	内容　-
イベント（委託）	-		
協力事業	相手先	-	
	内　容	-	
	回　数	-	延人数　-
アピールポイント	会員の子どもに対する思いやりの高さ、楽しませようとする意気込み。		
会発足のきっかけ	児童福祉の向上に情熱を燃やす青山学院大学の学生有志の呼びかけによって発足した。		
会員募集方法	青山学院大学でちらし配布		
参加動機	･子供が好きだから ･将来のために		
会員情報等	年齢層　18歳　～　24歳	大学生	年会費　6,000円
	会員数　85人	実働人数　50人	会則　あり
指導者	会員OB･OG		

夏のキャンプのキャンドルファイヤー

東京農業大学自然教育研究会ネイチャーズクラブ

代表　増田陽二郎

わたしが自然教育研究会ネイチャーズクラブ（以下ネイチャーズ）に入ったきっかけはせっかく東京農大に入ったのだから、ここにしかないサークルに入ろうという単純な理由でした。地域の小学生を対象に活動しているというのはサークル紹介のときに聞きましたがそれ以外のことはほとんどわからない気楽な状態で活動に参加しました。そこで活動の内容を知ったときは正直驚きました。その内容は地域の小学生対象に大学生が自然教室といった企画を考え、自然の不思議を小学生に自然教室で体験してもらうという大学生が主催者といった形のものでした。

そのサークルに本格的に参加し始めてから私は変わっていきました。最初は周りの目を気にしていてゲームなどをやるときも大学生が小学生対象のゲームを一緒にやるなんて恥ずかしいと思っていたのが、恥ずかしいという気持ちがなくなったどころか自分からやりだすようになったのです。そうしたら不思議と子どもとの距離が縮まった気がしました。そのとき先輩によく言われていた「自分の殻を破らなきゃ子どもが楽しまないよ」という言葉が理解できました。今ではもうゲームを実施するときに周りにどんな人たちがいても気にならなくなり、後輩にゲームを教える側の立場になっています。新しく入った人はたいていゲームをやることに戸惑ったり、恥ずかしがったりします。ですが、主催者である大学生が恥ずかしがったりすると子どももゲームをしていいのか困ってしまいます。そのようなことのないよう後輩に自分たちのやっているゲームには素晴らしい意味があり、また楽しさがあるのだからやっていることを誇るべきだということを伝えていきたいです。

上の文でゲームということばがよくでましたがネイチャーズではネイチャーゲームを活動に取り入れます。このゲームは自分の五感を使うもの、もしくは想像力を使うものがほとんどではじめてやる人はたいてい悩みます。特に自分の想像で書いたもの、もしくは考えたものを皆にみせるときは躊躇します。特に初めてやった子どもはすごく恥ずかしがります。ですが、子どもの想像力は素晴らしく、ときには大学生が感心してしまうようなものがでてきます。もっと子どもがその個人の想像力に自信を持ち、それを外に出していってくれたらと思います。

またネイチャーズの活動では学校ではしないような経験をしてもらおうと思い、竹での水鉄砲づくり、こんにゃく芋からのこんにゃくづくり等いろんな体験をしてもらっています。これらの体験が子どもの意欲、想像力の幅を広げることに役立てばうれしいと思います。

最近ではこのようなネイチャーズの活動が地域に伝わったのか参加希望者がどんどん増えています。ですが、大学生の人手不足のため参加をお断りすることもあります。どうやって実働人数を増やしていくかが最近の悩みです。

他にも子どもへの接し方、会の運営などいろいろな課題がありますが、東京農大にある豊かな自然を子どもに楽しんでもらえるようネイチャーズを盛り上げていきたいと思います。

こんにゃく作り

活動データ

問い合わせ先	東京農業大学厚木キャンパス学生サービス課	-	info@nodai-natures.com	
活動エリア	東京農業大学厚木キャンパス、厚木市立愛甲公民館	活動拠点	東京農業大学厚木キャンパス	
自主活動	春、夏と東京農業大学厚木キャンパスにて小学生を集め自然教室を開催する。内容は毎回さまざまではあるが、農大の自然を活用して行う。			
自主研修		内　容		講師（指導者）
初心者向け	実施している	毎週月曜日の昼休みに定例会を行う。また、不定期でネイチャーゲーム初級指導員の資格を持っている会員、OB、OGが主体となってネイチャーゲームを行う。		先輩会員、会員OB･OG
中上級者向け	実施している	夏休みの期間中に2泊3日もしくは3泊4日の合宿を行う。内容はネイチャーゲームやレクリエーションゲームを自然のなかで行う。		先輩会員、会員OB･OG
活動上の課題	会員数に対して実働人数が少ないため子どもの募集人数が限られ、募集人数を大幅に超える場合参加を断らなければならなくなる。			
連携（協働事業）	連携（協働）相手	厚木市立愛甲公民館	内容	冬の自然教室の実施。公民館側に資金提供、会場提供してもらいネイチャーズは人員提供、企画、運営を行う。募集は両者が行う。
イベント（委託）	近隣小学校で開催されるイベントのスタッフ 冬は自然教室を厚木市立愛甲公民館の共催という形で開催する。			
協力事業	相手先		なし	
	内　容		-	
	回　数	-	延人数	-
アピールポイント	子ども会活動及び社会参加活動の意義を理解し、ボランティアスピリットをもって、自己の成長を高め、思いやりを大切にする仲間づくりを目的とする。			
会発足のきっかけ	東京農業大学厚木キャンパスの豊かな自然を利用し自然教室を開くとともに、地域住民の方々に東京農業大学を知ってもらいたいため。			
会員募集方法	･毎年春の新入生の勧誘 ･ホームページでの呼びかけ			
参加動機	･子どもと接することが好きだから ･自分も自然にふれたいから			
会員情報等	年齢層	18 歳 ～ 26 歳	大学生	年会費　4千円
	会員数	58人	実働人数　30人	会則　あり
指導者	会員OB･OG、担当職員			

綿の苗を植え付けているところ

クリスマスケーキ作り

さがみちびっこクラブ

外部担当　福士朋子

【活動に参加したきっかけ】

もともと「さがみちびっこクラブ」は、地区子連下にあるシニアリーダーが2年前独立したものです。

したがって、今のメンバーの大半はシニアリーダーのメンバーであり、全体の3分の1程度は中学校からこういった活動をしていました。

ですから、きっかけは「面白そうだから」「友達がやっているから」だと思います。

今は「子どもが好き」「楽しい」「得るものがたくさんある」「ここが好き」だから続けている、そして続けたいと思えるのだと思います。

【活動していて、自分が変わったこと】

・関わる年齢層の拡大

参加してくれる子どもたちと一緒に遊び、同年代の仲間と話し合い、保護者の立場の人と意見を交換する。こんな経験を出来るのは今だけだと感じられます。

・自信

前へ出てゲームをしたりするのですが、初めは上手く出来なかったり周りが見えなくて「やりたくない」とか考えていたのですが、後輩に教える立場になると自然に出来るようになり自信が付きました。今ではそれを楽しむ余裕まで出てきました。

・目的意識

今までの活動では抜けていたことであり、抜けていてはいけなかったことだと思います。

「なんとなく」ではなく「なぜそれをするのか」「何のためなのか」

自分たちで企画を立てるのだから目的を考えられないと出来ないのです。

いつも自己満足にならないように気をつけて意識しています。

そして、「自分がなぜここで活動するのか」「自分がどうなりたいのか」「クラブをどうしたいのか」そうやって手探りでも少しずつ自分の理想の活動に近づけていければと思っています。

【子どもたちに何を期待しているのか、また変化など】

私たちはある程度の範囲では「失敗してもいい」と考えています。

失敗して、なぜ失敗したのか考えて、それでこそ身に付くと思います。

だから失敗を恐れず好奇心を持って挑戦して、失敗してしまったときはちょっと立ち止まって考えて次のステップに上がって欲しいです。

そして子どもだけではなく、保護者の方も一緒に参加して子どもに戻ってくれたらいいなと思います。子どもと一緒に参加して家へ帰ってからもその話で盛り上がって、そんなきっかけ作りが出来ればと思いながら企画させていただいています。

【クラブを運営していく上での課題・苦労】

人材不足が最大の課題です。

高校生への呼びかけや活動の楽しさを伝えていくことで、広げていかなければならないと考えています。

また、まだ発足2年目ということもあり活動の方向性が定まっていないのが現状です。

目的にかなった活動をしていくために、どういう活動をしていくか考えていきたいと思っています。

活動データ

問い合わせ先	会長宅	-	sagami_c_c@hotmail.com	
活動エリア	相模原市相原地区周辺	活動拠点	相模原市相原公民館	
自主活動	「あそびっこ隊」という年6回程度の様々な企画を行っている。今年度はウォークラリー、キャンプ、創作教室、お楽しみ会などを企画。参加募集は、相原地区の各小学校にチラシを配布し行っている。			
自主研修		内　容	講師（指導者）	
初心者向け	実施している	メンバー対象で年に一回、一泊2日で行う。企画の立て方、野外炊事の火のつけ方、井桁の組み方、ゲーム研修などをおこなう。	先輩会員、会員OB･OG	
中上級者向け	実施していない	-	-	
活動上の課題	スタッフ不足が大きな課題。高校への呼びかけをするなどして、まず認知度を上げるところからしなくてはならない。また、参加者側も塾など生活が変わり参加が減っている。魅力のある企画、そして時間帯の工夫などしていかなければならない。			
連携（協働事業）	連携（協働）相手	相原地区子ども会連絡協議会、青少年指導員	内容	養成研修会の企画運営･サポート。
イベント（委託）	公民館事業の企画運営･サポートなど。			
協力事業	相手先	相原地区各子ども会		
	内　容	レクリエーションゲーム、キャンプ（キャンドル）ファイヤー、キャンプのスタッフ、イベントのスタッフ		
	回　数	15回	延人数	80人
アピールポイント	大人でも子どもでもない中間の視点を活かした企画立て、友達のような上からではない関係、普段の生活ではない小学生･高校生･大学生･保護者という縦のつながりを作っていくことを目的とし活動しています。			
会発足のきっかけ	子ども会のない地域の子どもも含めた遊び場の提供をするために、シニアリーダーからの独立。			
会員募集方法	･地区中学校（3年生）にチラシ配布 ･ジュニアリーダーに呼びかけ			
参加動機	･活動内容が面白かったから。 ･メンバーが楽しかったから。 ･子どもが好きだから。			
会員情報等	年齢層	15歳以上　上限なし	大学生、専門学校生、社会人	年会費　1,000円
	会員数	16人	実働人数　10人	会則　あり
指導者	会員OB･OG、青少年指導員			

竹の水鉄砲作り

作った水鉄砲でペットボトル倒し

小学館レクリエーションリーダーズクラブに参加して

横浜国立大学教育人間科学部
仲里　歌織

小学館レクリエーションリーダーズクラブは、会員数約 250 人のクラブで、主にキャンプやイベントの運営をボランティア活動として行っている団体です。私は現在、キャンプレクリエーションリーダー研修会を終了し、キャンプ活動やイベント活動に関わらせてもらっています。

私がこのクラブに参加したきっかけは、もともと子どもが好きで子どもと関わることがしたい、またキャンプ活動にも興味があると思っていた頃に、大学で募集要項を見つけたことがきっかけでした。研修内容を見ると、かなり本格的な活動であることが一目で分かりましたし、そのクラブを知っている友だちが、結構大変らしいよと言っていたので、「よしっ、これならやりがいがある！！」とすぐ申し込みをしにいきました。

研修会の内容としては、日々の発声練習、集団ゲームの練習、 2 回の宿泊研修、キャンプソング･ゲームの指導、グループワークトレーニング、上級救命技能資格講習など全 10 回から成り、どれも内容の濃いものでした。

その中で特に印象深かったのが、合宿研修でした。 1 回目の研修は研修生が参加者の立場となり、様々なゲームに取り組ませてもらったり、キャンプファイヤーに参加したりしました。私はこの時「こんなにもキャンプ活動が楽しいのか」と心底驚き、「ぜひ私もこの体験を子どもたちに提供したい！！」と強く感じました。それと同時に、こんなにキャンプが楽しいのは、スタッフがとても一生懸命頑張ってくれているからだなぁ、スタッフってすごいなぁと感じました。その証拠に夜も遅くまでミーティングをしていて、その日の反省や次の日の企画が成功するように打ち合わせをしていました。スタッフの方たちが一生懸命企画してくれたように、私もこれから頑張ろうと強く感じた合宿研修でした。

研修会の中で岩田先生（小学館レクリエーションリーダーズクラブ代表）のお話を伺っているうちに、なぜこんなにキャンプを楽しく感じたのかが分かってきました。それは、スタッフの方全員が「ホスピタリティートレーニングを受け、常におもてなしの心で相手を楽しませよう」という気持ちを持っているからだろうと思いました。

現在私は研修を終え、クリスマスフェスティバルに参加させてもらっているのですが、ゲーム練習ひとつとっても妥協はしない(しっかりと指導してくれる)小学館レクリエーションリーダーズクラブは素敵だと思っています。妥協をしない根底には常に子どもたちに楽しんでもらいたい、子どもたちの笑顔が見たいという「おもてなしの心」があるからだと思うからです。

このクラブには小学校 4 年～高校 3 年生で構成されている少年部というところがあるのですが、上記のような「おもてなしの心」を学んでいる彼らは、笑顔で大きな声で挨拶をしてきてくれたり、素敵な子たちだなぁと感じます。このクラブの良いところは、「おもてなしの心」以外に、色々な年齢層の人が関わっているところではないかと感じます。少年部･青年部･指導部からなり、大人から子どもまで一緒に活動しています。小学部の子たちと一緒にゲーム練習をした時も、自信なさげにしている子を励まし、そのことでちょっと頑張ってみようと勇気を出しているところを見かけるからです。

今後も色々な年齢の人と関わり、励ましたり励まされたり、クラブのみんなと共に成長できたら良いなぁと感じています。

小学館レクリエーションリーダーズクラブの概要

【お話を伺った方】
小学館レクリエーションリーダーズクラブ代表　岩田　勉　氏

会員数約 250 人のクラブです。少年部（35 人、小学校 4 年生から高校 3 年生）、青年部（130 人、大学生年齢以上で年齢制限はなく、社会人も含む）、指導部（ 80 人、青年部から継続して活動しているメンバーで、 10 人はスタッフ（職員））から成り立っています。主に、キャンプ・イベントの運営・指導をボランティア活動として行っています。**「自己表現の場・自分を成長させる場」「仲間づくりの場」「勇気、チャレンジ精神を育む場」「課題解決能力（生きる力）を育む場」**として、自らが積極的にクラブの活動に携わっていくことを旨としています。

あそび・冒険・体験・自然を柱に様々な野外活動を行っています。「あそぼうけんクラブ」「やまと自然学校（ 1 泊 2 日キャンプ）」「キッズ★アウトドアクラブ（幼児対象の野外活動）」など日帰りから、 3 週間に及ぶ長期キャンプに、年間数千人の子どもが参加しています。リーダーは子どもたちのカウンセラーとして、寝食をともにし、徹底した安全管理と、子ども指導を行っています。

また文化・イベント活動として、物語を繰り広げながら手品を展開する「ストーリーマジックショー」と創作児童演劇を実施していて、親子で楽しめるプログラムです。演出・脚本・音響等のすべてをリーダー自らが作り上げます。また「巡回遊びの学校（遊びの出前）」では幼稚園・小学校の子ども・教員を対象としていて、多様な遊びの指導・運営を行っています。

これらの活動を支えるリーダー養成事業として、**「キャンプ・レクリエーションリーダー研修会」**を実施しています。主に大学・専門学校等に募集をかけていて、教育・福祉系の学生が 5,6 割います。また幼稚園、保育園、福祉系の仕事をしている社会人もいます。東京キャンプ協会、東京都レクリエーション協会と提携していて、研修を修了しますと、「レクリエーションインストラクター」「キャンプインストラクター」「自然体験活動リーダー」「上級救命技能」の 4 つの資格取得ができます。参加動機はいろいろですが、楽しさや仲間ができたことを優先するようになり、研修を終わってみて結果として資格が取れたという感じです。 5 月初旬に始まり、 8 月に研修を修了しますと、会員として残りイベントの運営に携わっていくことになります。

その他に子どもとの接し方を学ぶために、ホスピタリティートレーニング（ HT ）、グループワークトレニング（ GWT ）などを年に 4,5 回実施しています。 HT はおもてなしの心を学ぶもので、笑顔で迎え、きちんとあいさつをして、子どもにも親にも安心感を与えるためのものです。 GWT はゲームを通して、仲間づくり、協力、人の痛みを理解することをゲームを通して学ぶものです。プロジェクトアドベンチャーの手法も使っています。

しかしトレーニングでは理論的なものを学ぶことが中心で、実際には活動の中での体験が最も重要です。現場で子どもたちと接して、ふりかえりそれを次の活動にフィードバックしていくことの繰り返しで学んでいます。そうやって会員・リーダー間で切磋琢磨しながらお互いを高め合い、日々成長し、活動に参加しています。

ジュニアリーダー活動に関わってきて

第1回神奈川県ジュニアリーダー大会
実行委員長　増井保幸

ジュニアリーダーは、「子どもと大人のパイプ役」として全国の多くの市区町村に存在し、中高生を中心に組織される地域密着型の青少年団体です。主な活動として、各地域の子ども会活動のサポートや、地域の行事への参加・協力などを行っています。

私は伊勢原ジュニアリーダーズクラブに所属し、現在は会のスーパーバイザーとして会員の指導・サポート及び会の総括をしています。また地元での活動の他に、県の子ども会連絡協議会の行事などにも積極的に参加し、県内のジュニアリーダーのネットワークづくりにも努めています。

さて、私がこのジュニアリーダーという活動の存在を知ったのは、もう11年も前の事になります。当時は小学6年生で、夏休みに市の子ども会連絡協議会が主催した「イン・ジュニアリーダー合同研修会」という1泊2日のキャンプに参加した時の事でした。このキャンプは、市内の子ども会に所属している小学5，6年生60名が参加者となり、かまどや飯ごうを使ってカレー作りをしたり、キャンプファイヤーをしたり、ナイトウォークをしたり、2日目にはマスのつかみ取りをして獲った魚を調理したりと、非常に楽しい1泊2日間でした。

そしてこのキャンプの企画・運営をしていたのがジュニアリーダーのお兄さん・お姉さん達でした。自分よりも少し年上で、手際よく私たち参加者をリード・サポートしてくれる彼らの姿がとてもカッコよく、憧れを抱いたとともに、私もジュニアリーダーになりたいと強く感じました。この事がきっかけとなって中学1年生の夏に伊勢原ジュニアリーダーズクラブに入会し、現在まで活動を続けてくる事となりました。

これまで10年間の活動を通じて、私は様々な体験・経験をする事ができました。子ども会の行事や地域のイベントに参加して、子どもからお年寄りまで様々な方とふれあえた事。自分達で企画・運営をした行事が成功し、仲間と喜びを分かち合った事。様々な地域のジュニアリーダーと知り合い、かけがえのない友人が沢山できた事。どの活動も普段の生活の中ではなかなか味わう事のできなかっただろう貴重な経験ばかりです。もちろん活動の苦労もそれなりにありましたが、嬉しかった事も辛かった事も全部ひっくるめて一生モノの思い出です。

また、活動を通して子ども達と長く関わっていると自分自身が成長するとともに、子ども達やクラブの会員達が日々成長している姿をうかがうことができる事もこの活動の大きな魅力です。

小学校に入学したての頃はまだ頼りなかった小さな子が、学年が上がっていくといつの間にかリーダーシップを取るようになり、6年生を迎える頃には子ども会のリーダーになって年下の子の面倒を見ていたりします。ジュニアリーダー達も同様です。徐々に活動に対する責任感が芽生えてきたり、ジュニアリーダーの意義や楽しさを実感してくるようになると、積極的に活動への参加や発言をしてくれるようになります。このようなシーンに遭遇するたびに、活動をしていてよかったと心の底から実感できます。

中高生の頃には気づく事ができませんでしたが今になって考えてみると、「活動していて楽しいから」という理由でやっていたジュニアリーダーの活動は、実は自身のためだけではなく、微力ではありますが子どもたちを始め地域の方々に貢献している活動だったのだと感じ、続けてきてよかったと改めて思う事ができます。この活動を続けてこられた事を私は誇りに思います。今後も自己のため、地域のためにこの活動を続けていきたいと思います。

ジュニアリーダーの活動の様子

第1回神奈川県ジュニアリーダー大会

アクティブキッズワールド2005

お年寄りとの親睦

キャンプでの野外炊事

渋谷ファンイン

ユースワーカー　岩間文孝

渋谷区内11箇所のファンイン

渋谷ファンインは、渋谷区内で子どもの居場所づくりをしている地域の団体です。「ファンイン」とは、中国語で「歓迎」という意味です。当初は子ども達の居場所の総称として使っていました。その後、渋谷区内 11 箇所に活動が広がり、それぞれの地名をつけて「〇〇ファンイン」と呼ぶようになりました。

わたしは、教師を目指していましたので、たくさんの子どもと触れ合う機会がほしいと感じ、ファンインの活動にかかわることになりました。ボランティアをしたいという気持ちではなくて、自分の勉強のためにしたい、自分自身を生かすきっかけにしたいといった思いがありました。

渋谷ファンインの活動は、 3 つのスタイルがあります。1つは、たまり場活動です。子ども達が自由に集まり自由に過ごします。そのたまり場には、ユースパートナーとよんでいる若者が、子ども達の相談相手や遊びのサポーターとしてかかわります。 2 つ目は、クラブ活動です。子ども達に希望の多いスポーツ、ダンス、バンド等の活動や学習活動を行います。 3 つ目は、体験活動（イベント）で発表の場、ふれあいの場として、時には、学校、地域と連携して行います。

ファンインでのわたしの最初のかかわりは、上原ファンインでユースパートナーとしての活動でした。実際に活動してみると、たまり場は、不登校の子ども達も気軽に立ち寄れる場でした。そこで、不登校の子ども達の相談活動も行うピアサポーターとしての活動も行うようになりました。その活動が現在は、ファンインピアサポート委員会として学校や教育委員会と連携しながら不登校、ひきこもりの子ども達の自宅へ訪問する等の活動も行うようになり、わたしも何人かの子どもの自宅へ訪問しています。

活動を続けていくことで、今までに出会ったことのないような子ども･若者の存在を知ることが出来ました。多様な子ども･若者との出会いは、わたしにたくさんのことを学ばせてくれました。そして、子どもたちが毎週のように来て、満足そうに帰っていく姿は、わたしに大きな喜びも与えてくれます。また、ファンインの大人スタッフに活動を認めてもらうこと、集まってくる子どもの保護者の方に喜んでもらえることも、わたしの喜びの 1 つです。子どもたちが喜んでくれる、地域の大人に認めてもらえるという 2 つの有用感が、わたしをここまで育ててくれ、そして、活動を続けられた原動力になっているのだと思っています。

ファンインに集まる子どもたちを見ていると、すごいなっていつも感じさせられます。子どもたちの本能から遊ぶ姿、何でも吸収してしまう吸収力、発想力には本当にびっくりしています。一方で、みんなで遊ぶ事に対して慣れていない、 1 人で遊ぶ事ばかりの子どもが増えていることに不安を感じることも多くなりました。

子ども達は、感性が豊かで、変化にもとても敏感です。その子ども達と共に育っていくためにも、子ども達の声に耳を傾け、子ども達に寄り添い、地域の新しい力を取り込みながらこれからも活動していきたいと思ってます。

渋谷ファンインの活動の様子

お菓子づくり
（本町ファンイン）

玉原高原ハイキング
（本町ファンイン）

工作教室
（代々木ファンイン）

たまり場活動
（上原ファンイン）

冒険遊び場
（せせらぎファンイン）

自然体験
（鳩森ファンイン）

ストリートバスケット
（美竹ファンイン）

ピンポンクラブ
（代官山ファンイン）

クレイメーション制作
（恵比寿ファンイン）